

ロー・スクールで学んだ ものごとを深く掘り下げて 検討するおもしろさ

2005年卒 京都地方裁判所判事補
遠藤謙太郎さんに聞く

ロー・スクール1期生の遠藤謙太郎さん。当時、「司法試験に早く受かりたいれば予備校へ!？」との風潮もあったなか、「法学をしっかりと修める」べく、ロー・スクール進学を選択。裁判官となられた遠藤さんが、学問との遭遇を経て得たものとは？

を志望していましたが、司法修習を経て、裁判官になることを決意しました。

「それは？」

「公平に線を引く」という仕事を自分もやってみたいと思ったんです。弁護士の仕事は、基本的には「依頼者のため」という側面が強く、そこがまさに魅力なのですが、より公平な立場から、事実を見極め、法と良心に照らし、事実を判断を下す、裁判官の姿に強く惹かれました。実際やってみると、大変奥深く、難しいのですが、日々の判断が自分の心の充実にもつながっている気がします。

「ちょうど裁判員制度の開始の時期と重なりましたね。」

そうですね。京都府内初の裁判員事件も含め、実際に何件か、裁判員裁判を担当させていただきました。裁判員制度という大改革を真に意味のあるものとするため、国民の理解の促進を図り、実際の運用を吟味していくべき改革初期は、とりわけ重要な時期でした。私たち法律家は、もちろん必死で、しかし、裁判員、補充裁判員に選ばれた方々はみなさん、本当に最後まで一生懸命取り組んでいただきました。いい裁判ができたと思っています。

「司法のあり方が変わるときですね。はい、まさに。国民のみなさんが、これまで縁遠かった裁判に触れられるわけですからね。私たちも、今まで以上に高い目的意識を持って努力を重ねる必要があります。」

学問の深淵にいざなわれる
ことにおそれは不要!

遠藤さんはロー・スクールの初年度生なんですね。

はい。大学に入学した時点では、ロー・スクールはなく、将来を見据えて勉強しなければならぬという雰囲気でもなかったのですが、大学1、2回生のころはあまりガツガツせず（笑）、アカペラサークルに入るなどして学生生活をエンジョイしていました。

「京大生の典型だったんですね。」

そうですね。当時、アカペラチームがやってきて、バンド活動がものすごく忙しくなっていました。弁護士になるために京大に来たのだからこのままではマズいと思い、2回生の冬に引退して勉強にシフトしました。

「そのあたりからロー・スクールを意識？いえ、実際には、学部の専門の授業を真面目に受けるようになってからです。先生の言葉に何か底知れないものを感じましたし、学生に対する教育姿勢にも感じ入るところがありました。将来、法曹として生きていくうえで、自分にとって何が大切かを考えるようになり、少しくらい遠回りになっても、すばらしい研究者・教育者のもので、法学をしっかりと学びたいと思い、ロー・スクール進学を決めました。」

「入ってみていかがでしたか？毎日たいへんでした（笑）。学部時代より、さらに踏み込んだ勉強をする

中で、学問の深淵に誘われ、迷子になりそうなことも何度もありました。しかし、心配は一切無用です。そこには、疑問を思い切りぶつけることのできる、当代随一の先生方がおられるのです。先生方は、それぞれの個性に応じて、素晴らしい球を投げ返してくださいました。さらに、普通なら会うこともできないような第一線の実務家の方々が来てくださって、実務の最前線で生じている問題に対して、実際にどう取り組まれているのか、存分にお話を伺うことができました。このような経験を通じ、ものごとを深く掘り下げて検討することのおもしろさを実感することができたように思います。

「法曹を目指す後輩にアドバイスをお願いします。」

いかに効率的に司法試験に合格するか、というような視点も大切ですが、まずは、学部の授業とロー・スクールにて、ためらうことなく、学問の深い淵に誘われてください！超一流の指導者のもとなので、その環境を活かさない手はありません。

「ありがとうございます。」



遠藤謙太郎
えんどう・けんたろう
1981年広島県生まれ、広島大学附属福山高等学校卒業、2004年京都大学法学部卒業、法科大学院に進学し、2008年に京都地方裁判所の裁判官に。趣味は、音楽、銭湯巡りなど。

先生の言葉を全力で 吸収した毎日が いまの自分の基礎を築いた

2007年卒 弁護士 藤原智絵さんに聞く

新司法試験が確立する過渡期に、京大法学部で学生時代を過ごした藤原さん。研究目的ではなく、現場や社会で通用する教養と即戦力を養うためのロー・スクールは、藤原さんに大きな力を与えてくれました。

日々成長を感じる、 ロー・スクールでの体験

「高校の時から法学部を目指されていたのはなぜですか？」

13歳のときに観た「判決の時」という映画がきっかけで、ずっと弁護士になりたくて。こんなに自分の頭をフルに使って社会に貢献できる職業があるんじゃないか、と思ったんです。

「京大の法学部とロー・スクールを選んだ理由を教えてください。」
高校生のときキャンパスを訪ねて、自主性が尊重されている自由な雰囲気

「ここで勉強したい」と感じました。司法試験にロー・スクールが必須になったのは、大学に入学してから。母校への信頼と愛着があって、高い合格率を目指すという京大のロー・スクールを選びました。

「ロー・スクールと学部の勉強との大きな違いは？」

ロー・スクールは、基礎科目の必修授業で実務家になるための素養を叩き込むとともに、専門分野の基礎を築く場所。選択科目では、現代特有の先進的な法律や実務が学べます。私は公害や環境の問題に関心があったので「環境法」を選択しました。これは学部では学べない分野です。

「学部では網羅していない法律を、なぜロー・スクールでは教えているんですか？」

法律は実務で活かされてこそその存在です。時代に合った法律を実務とからめて学び、人間の幅や知見を広げる、そういうねらいがあったんだと思います。「環境法」は確立したのが新しい法分野ですが、骨組みは民法と行政法の組み合わせであり、過去の公害訴訟の積み重ねの上にあります。過去と現在、未来を橋渡しする奥深い分野だと思っています。

「授業はどんな内容でしたか？」

どの授業もソクラテス・メソッドという、双方向形式の授業方法をとっていて、一瞬一瞬に学生の積極性が問われます。インプットだけでなくアウトプットが必要になるため、とにかく予習し

ないとついていけません。現役の裁判官や検察官、弁護士の先生方が教えにいられて、様々な議論をします。それを繰り返して、家に帰ったら復習して…。正直プレッシャーとの戦いでした。

一流の講師による 親身の指導が、力をくれた

「司法修習生時代に感じたことは？」

物事を考えるための基礎力を身につけてこれたなと感じました。もちろん、学生時代と修習生活は全く違います。でも「この証拠から何が引き出せるか」「どう認定できるか」を基礎理論をベースにしながら考え抜く。その力をロー・スクールで培うことができたのではないかと思います。ちなみに、京大では、教科書に名前が載っているような先生方が教えてくださるため、他校出身の修習生からもとても羨ましがられました。

「現在お勤めの事務所に入った理由は？」

私の場合、特に大きな事務所に入りたいという希望はなかったんです。むしろ、小さくても、人としてしっかり繋がる暖かい町医者みたいな弁護士がい

る事務所に入りたかった。今の事務所は、弱い人の力になりたいという人たちの集まりで、なりたいたい弁護士像と重なりました。

「その弁護士像は、どう形成されていたのですか？」

京大は自主自立を重んじる環境なので、物事を自分で考える力が養われます。一人の人間として信念を持った弁護士になりたいと思ったのは、そこがルーツかもしれないですね。

「法律家を志す高校生に、メッセージをお願いします。」

今の司法を目指す人にとって、ロー・スクールは避けては通れない道です。私は、第一線で活躍されている先生方が、「とにかく私たちが与えることを吸収して、全力で食らいつけてくれれば大丈夫」と言ってくれたから頑張れました。そう信頼できるのが京大のロー・スクールです。努力が結果となって報われる学生最後の場所がここだと思えます。ぜひ若いみなさんに同窓になってもうえればと思います。



藤原智絵
ふじわら・ともえ
1983年京都府生まれ、私立同志社高等学校卒業後、2003年京都大学法学部に入學、2007年卒業。同年4月、京都大学のロー・スクールに入學し、2009年卒業。同年司法試験に合格。1年間の司法修習生を経て、現在、山口健一法律事務所にて弁護士として活躍。

国内外を問わず 多くの人と交流し 大学生活を実りあるものに！

2008年卒 財務省 澤田多実子さんに聞く

高校生の時点で「国際公務員」を目指し、それに向けて、京大法学部の特徴を存分に活かしてそのスタートラインに立った澤田多実子さんに、卒業後の進路を明確に定めた大学生活の送り方をうかがいました。

んです。

——いまもそれは思い続けていらっ
しゃいますか？

10年後ぐらいにそうなるように、
いまは目の前の仕事にしっかり取り組
み、いろいろな人に会い、いろいろな
ことを経験して視野を広げていきたい
と思います。

——高校1年生の時点でそういうビ
ジョンを持ったのは何かきっかけが
あったのですか？

緒方貞子さんの活躍を知ったこと
でしょうか。国際社会で貧しい国の人の
ために活動されている姿に魅力を感じ
ました。

——京大の法学部を目指そうと思っ
たのは？

地元が関西なのでというのもありま
したが、国際公務員を目指す自分
にとっては大学の中にいるだけじゃだめ
だと思ったので、政治や法律の勉強以
外にもやりたいことが比較的自由にで
きる京大に行きたかったです。

——ということは、大学時代は何を中
心に？

海外に行きまわりました。高校時代
にイギリス、オーストラリアに行っ
てましたが、大学に入ってからに、タイ、
フィリピン、シンガポール、台湾、チエ
コ、オーストラリア、ハンガリー、フ
ランス、オーストラリア、ドイツ、に行
きました。台湾には3回、フランスに
は2回行きました。学校の勉強をしな
がらアルバイトをしてお金をためて、

休みに入ると海外に行つて…の繰り返し
です。

——目的がはっきりしていたとはいえ、
すこいですがね。いろいろ得られたもの
はあると思いますが、ひとことと言
うと？

ガイドなしの旅行がほとんどだった
ので、必然的に現地の人と仲良くなり
ました。いろいろな国の成り立ちが
あって、社会の状況があって、そこに
いろいろ職業や生き方がある…。自分
が生きている世界がいかに狭いかとい
うことを、何度も痛感しました。アジ
アの国に行く前などは、「日本が援助
している国なんだなあ」というイメ
ジでしたが、フィリピンで出会った
いわゆるストリートチルドレンたちは貧
しいながらも懸命に生きているという
印象でしたし、社会も活気がありまし
た。またオーストラリアは「家族」の
つながりがとても強い国で、いまの日
本との違いを感じました。まとめると、
日本に暮らして普通だと思つてること
に對し、あれこれ考えるようになって
たということでしょうかね。

将来の目標にあわせた 大学生活を

——公務員になるには試験や面接とい
うステップがありますが、その対策
は？

公務員試験の準備は、4年生になっ
てから集中して3カ月ほどみっちりや
りました。問題は、どこを第一志望に

するかということと、そこに向けての
面接対策ですね。

——財務省は第一志望ですか？

はい。はじめは国際関係なら外務省
かと思つたんですが、いろいろ調べる
うちに、自分の将来の目標からすると、
まずは財務省だと思つたんです。

——なぜですか？

財務省というのは「日本として最善
の方向に向かうためにどうするか」を
考え、実行するところなので、全体的
な視野で物事を捉えることができま
す。また大きなツールを持つていて、
ほぼ国民全員にかかわることを扱いま
す。国際関係の前に、まずは自国のさ
まざまな政策にかかわることが大事だ
と思つたからです。

——高校生にひとことお願いします。

京大には、やりたいことが好きなだ
けで自由さがあります。大学の内
外を問わず多くの人と出会い、いろい
ろな経験をし、その中で自分が本当に
進みたい道を見出してほしいと思
います。

——ありがとうございました。

海外旅行で視野を広げた 大学時代

——いまは財務省でどのようなお仕
事をされていますか？

フランスの税制のあり方を調査し、
これからの日本の税制に活かせること
などを研究しています。

——早い段階から公務員を目指して
いたのですか？

はい、高校1年生の時から国連の職
員といった国際公務員になりたかつた



澤田多実子 さわだ・たみこ
1985年兵庫県生まれ、神戸女学院
高等学校卒業、2008年京都大学法
学部卒業、公共政策大学院に進学
し、2010年財務省に入省。趣味は
読書、茶道、ピアノ、ヨガ。

厳しい就職活動を 戦い抜く「人間力」を 養える環境

2003年卒 総務省 福西竜也さんに聞く

歴史や政治への興味から、京大法学部に入学した福西竜也さん。自由な校風と自律した学生たちに刺激を受けながら、徐々に将来のビジョンを明確にしていきました。何が福西さんの糧となり、目標へとつながったのでしょうか。

たのはなぜですか？

歴史や政治経済に興味があり、法学部ならその分野を学べると思いました。また、経済学部の授業も取れたことが後々役立ちました。この時点では、将来の方向性は定まっていまわなかった。卒業後の進路が見えなかつた。

国際関係論研究会というサークルに入り、サークルの勉強会の中で政治や行政分野に興味を持ちました。また、外務省を目指す先輩や入省した先輩と接して、初めて国家公務員という職業を意識しました。

総務省を志されたのはなぜ？

最初は外交に興味があり、外務省を含む省庁の説明会を聞きに行きました。その時に総務省の話も聞いたのですが、話をされた総務省の方の人間性に強く惹かれたんです。「なぜ、この人は若くしてこんなに経験豊かで深い人間性があるんだろう」と。それは、地方で若くして管理職を務め、責任ある立場で仕事をした経験があるからだと感じました。

それがきっかけで、専門を決めたのですか？

はい。3回生で村松岐夫先生の行政学ゼミを専攻し、地方自治に携わりたいと確信しました。当時「国と地方自治体の借金は約666兆円ある。国家公務員になったら、これをどうするか君たちの仕事なんだ」と言われたことが、今でも印象に残っています。

勉強だけじゃない、「人間力」が突破の鍵

総務省への就職活動は大変だったのではないですか？

一次試験合格後、官庁訪問の期間が2週間くらいありました。東京に半月ほど滞在して、毎日朝から深夜まで面接があつて本当にキツかったです。

それを乗り越えられたのは？

京大は自由な校風でしたが、同時に責任も求められる環境でした。法学部の勉強、サークル活動、バイトなど、義務や強制ではなく自分で考え、行動する中で、様々な人と出会いました。実際、おもしろい人が本当に多かつたんです。また、高校時代から熱中していたポートと大学生活を両立するために、あえて社会人ポートのクラブチームに所属したことも大きかったです。社会人の中で、自ら考えて練習をこなし、またクラブの運営にも関わられた経験が財産になりました。官庁訪問の際、20人弱くらいの人の面接を受けましたが、大学時代の出会いや、やり遂げたことが自信になりました。勉強だけでは得られない、「人間力」が身に付いたと思います。

総務省の仕事の魅力は？

総務省が他の省庁と違うのは、若い時に一人で地方に出され、肌感覚で現場を知ることができることです。そういう経験ができるのは、霞ヶ関で総務省だけなんです。また、地方に何度も

出向して自治体職員として仕事をするわけですが、しがらみにとらわれず、現場を改革をしていくことも求められています。時には現場で制度の矛盾を実感します。でもその実感を国に戻った時にフィードバックして、次の制度に生かす。それが非常におもしろいですし、制度作りが当たっては、現場を知っていることが大きな強みです。

今後のビジョンを教えてください。

入省10年あたりは、制度作りの中核を担う世代です。地方行政分野なのか、財政分野なのか、税制分野なのか、どの分野に携わるかはわかりませんが、地方での経験を生かして、現場の声を制度に反映させていきたいです。また、何でもやらなければいけないですが、その分、常に刺激がありますし、様々なことをやってきた人には、人間性に深みがあります。先輩方に魅力があるのはそういう経験があるからで、自分もそうなりたいですね。

ありがとうございます。

尊敬できる人との出会いが 進路を開いた

現在、どのようなお仕事をされていますか？

総務省から香川県に出向しています。自治振興課という部署で、国と市町村の間に立ち、財政面、行政面にわたり取りまとめ、助言をする仕事です。特に、市町村の財政の健全化には力を注いでいます。

京大の法学部を目指そうと思っ



福西竜也 ふくにし・たつや

1979年滋賀県生まれ、滋賀県立膳所高等学校卒業、2003年京都大学法学部卒業。同年総務省に入省し、8月に岩手県庁に出向、2005年4月から内閣府で勤務。2007年7月から総務省行政課で地方分権改革に携わる。2009年4月から香川県庁に出向、現在、自治振興課長を務める。

試行錯誤しながら 勉強を続けた日々が 自分の人生の大きな財産に

2008年卒 三井物産株式会社法務部
葭中聡さんに聞く

法律のプロフェッショナルをめざし、日夜勉強を続けた葭中聡さん。企業への就職に至るプロセス、そして社会人となった今、やりがいのある仕事に就き充実感に満ちる想いをうかがいました。

目標を実現するために 惜しまない努力

—三井物産の法務部ではどのような仕事をされているのでしょうか？
私は今、アジアと大洋州を担当する部署にいます。例えば、契約書を作成するうえで、法的な視点からのチェックや修正、ときにはプロジェクトの最初の部分から参画し、営業部の方々と一緒に案件に取り組んでいくこともあります。日本法や英米法に関する知識はもちろんのこと、国ごとに法律が違いますので、日々勉強です。やりがい

があり、とてもおもしろいですね。

—法律にかかわる仕事をしたいという想いは以前からお持ちだったのですか？
高校時代、将来の夢は漠然としていて、法学部を選んだのも正直、なんとなくでした。入学した時期にロー・スクールの制度ができ、まわりも法曹志望が多く、私もせっかくな入学したのだから何らかの資格を持ったプロフェッショナルを目指して頑張ろうと思えました。

—では、入学してからは勉強一筋？
いえ、陸上競技部に入学して忙しかつたこともあり、自由には責任が伴うということも知らず(笑)、1回生の頃は自由な生活を謳歌していました。
—本格的に勉強を始めたのはいつ頃でしたか？
2回生になり、まわりが本気で勉強を始めたのを見て、これはまずいと思い、そこから人生の軌道修正を(笑)。旧司法試験やロー・スクール受験のため朝起きてひたすら勉強、その合間に生活費を稼ぐためにバイトをしながら部活で息抜きするという、寝る間も忙しい生活でした。

—そこまで自分を律せられるのはすごいことですね。
旧司法試験の合格者数は減少傾向でしたし、ロー・スクール入試までも期間が決まっていたので「やらなければならぬ」という状況でした。とにかく合格を目指して必死に勉強したのですが、残念ながら良い結果には結びついていませんでした。

—友人に誘われた就職説明会がきっかけでした。いま思えば縁があったんでしょうけど、それが偶然にもパナソニックで(笑)。そのとき、開発から製造・販売・流通まで業務が幅広く、海外と接する機会も多い、メーカーの魅力に気づかされました。こんな大きな集団の中で、さまざまな部署の方とかわりながら、法律を活かした仕事ができるんだとワクワクしたんです。
—個人としては、集団の中で働くことに惹かれたのはなぜですか？
私自身、サークルでは男女混合のソフトボールをやっている、性別や学年を越えて信頼関係を築けたことが自信になりました。その経験が、企業の中で自分の知識や能力を活かすやりがいにつながったんだと思います。

—就職活動はどのように？
書類応募も含めると30社くらい、選考が進むにつれ10社前後に絞られてきました。メーカーの法務部という意志は固まっていたので、OB・OG訪問などで法務部の仕事内容についても学びました。
—特に心がけたことは何ですか？
知識や能力面はもちろん、人と知り、も大切な要素として求められていると感じたので、自分らしさや対人関係をどう築いてきたかを伝えようと思えました。

自分の進路を 問い直すことから開けた道

—どのような経緯で企業への就職という選択に至ったのでしょうか？
限られたチャンスのなかで新司法試験に挑戦することが、将来の自分にとって正しい選択なのか？と、改めて自問自答しました。そんなとき、陸上競技部の一年上の先輩が企業の法務部へ就職すると聞いたんです。初めて「企業の法務部」という仕事を知り、法曹の道以外でも法律に触れる仕事があるのであれば就職活動をしてみようという方向性を決めました。

—やはり法律関係の仕事につきたいという想いは一貫して変わらなかった。
頑固な性格といえます(笑)。ずっと勉強していたので、就職という決断にはとても悩みました。でもまったく関係のない仕事はしたくないし、それだけは逃げたくないし、譲れないという思いがありました。
—就職活動はどのようにされましたか？
法務部採用をしている会社がほとんどなく、いろいろと会社を調べました。とにかく受けてみようと思い、法務部がある会社にエントリーし、感触のある企業には面接の中で法務部に行きたいと積極的にアピールしました。結果、ご縁もあり現在の会社から連絡を受け内定をいただくことができました。

—現在の仕事の魅力や将来の目標などなく、いろいろと会社を調べました。とにかく受けてみようと思い、法務部がある会社にエントリーし、感触のある企業には面接の中で法務部に行きたいと積極的にアピールしました。結果、ご縁もあり現在の会社から連絡を受け内定をいただくことができました。

—法務部ではどんなお仕事を？
デバイス部門の担当として、部品の開発から販売に関わる各種の契約書の検討業務を行っています。開発、営業、他のスタッフ部門などを交えて、法的な観点から契約内容の調整、確認をします。また、調達から消費者に完成品がわたるまで、今やどんなメーカーでも国内では完結せず、海外とのビジネスの機会にとっても恵まれています。
—役割としては、トラブルを未然に防ぐ目的で？
それもあります。新規製品の開発や拡販、提携の一步を踏み出すビジネスチャンスに立ち会えるので、マイナスマ面の回避だけではありません。事業の成功・発展につながるよう意識して、契約内容を作っていきます。
—どんなところにやりがいを感じますか？
メーカーの醍醐味は自社製品を持つこと。日々、どの製品もたくさんの方の努力の結晶だと驚かされますし、そのぶん、自社製品への愛着や、多くの人に届けたいという思いが湧いてきます。保守的ではなく前向きに法律の知識を活かせることが嬉しいですね。また、開発や営業の方々のお話は、製品技術から世界情勢までとても興味深い。「事業を成功させる」という共通目的のもと議論し、よい方向性が見つ

多くの人と出会い築いた信頼関係が 企業の一員としての確かな力に

2007年卒 パナソニック株式会社
リーガルコンサル&ソリューションセンター
小林明日香さんに聞く

学部や年齢、性別の垣根を越えたサークルでの活動が、今日小林さんの礎になった。立場や主張の違いを尊重しながら、事業推進のために法務の立場からできること、すべきことを提言していく仕事。そのやりがいと、進路を見出すまでの学生時代とは？

—考えていました。

—メーカーの法務部を目指そうと考えたのは？
友人に誘われた就職説明会がきっかけでした。いま思えば縁があったんでしょうけど、それが偶然にもパナソニックで(笑)。そのとき、開発から製造・販売・流通まで業務が幅広く、海外と接する機会も多い、メーカーの魅力に気づかされました。こんな大きな集団の中で、さまざまな部署の方とかわりながら、法律を活かした仕事ができるんだとワクワクしたんです。
—個人としては、集団の中で働くことに惹かれたのはなぜですか？
私自身、サークルでは男女混合のソフトボールをやっている、性別や学年を越えて信頼関係を築けたことが自信になりました。その経験が、企業の中で自分の知識や能力を活かすやりがいにつながったんだと思います。

—就職活動はどのように？
書類応募も含めると30社くらい、選考が進むにつれ10社前後に絞られてきました。メーカーの法務部という意志は固まっていたので、OB・OG訪問などで法務部の仕事内容についても学びました。
—特に心がけたことは何ですか？
知識や能力面はもちろん、人と知り、も大切な要素として求められていると感じたので、自分らしさや対人関係をどう築いてきたかを伝えようと思えました。

—友人に誘われた就職説明会がきっかけでした。いま思えば縁があったんでしょうけど、それが偶然にもパナソニックで(笑)。そのとき、開発から製造・販売・流通まで業務が幅広く、海外と接する機会も多い、メーカーの魅力に気づかされました。こんな大きな集団の中で、さまざまな部署の方とかわりながら、法律を活かした仕事ができるんだとワクワクしたんです。
—個人としては、集団の中で働くことに惹かれたのはなぜですか？
私自身、サークルでは男女混合のソフトボールをやっている、性別や学年を越えて信頼関係を築けたことが自信になりました。その経験が、企業の中で自分の知識や能力を活かすやりがいにつながったんだと思います。

自社製品への愛着と熱意を もって、仕事できる喜び

—法務部ではどんなお仕事を？
デバイス部門の担当として、部品の開発から販売に関わる各種の契約書の検討業務を行っています。開発、営業、他のスタッフ部門などを交えて、法的な観点から契約内容の調整、確認をします。また、調達から消費者に完成品がわたるまで、今やどんなメーカーでも国内では完結せず、海外とのビジネスの機会にとっても恵まれています。
—役割としては、トラブルを未然に防ぐ目的で？
それもあります。新規製品の開発や拡販、提携の一步を踏み出すビジネスチャンスに立ち会えるので、マイナスマ面の回避だけではありません。事業の成功・発展につながるよう意識して、契約内容を作っていきます。
—どんなところにやりがいを感じますか？
メーカーの醍醐味は自社製品を持つこと。日々、どの製品もたくさんの方の努力の結晶だと驚かされますし、そのぶん、自社製品への愛着や、多くの人に届けたいという思いが湧いてきます。保守的ではなく前向きに法律の知識を活かせることが嬉しいですね。また、開発や営業の方々のお話は、製品技術から世界情勢までとても興味深い。「事業を成功させる」という共通目的のもと議論し、よい方向性が見つ

—法務部ではどんなお仕事を？
デバイス部門の担当として、部品の開発から販売に関わる各種の契約書の検討業務を行っています。開発、営業、他のスタッフ部門などを交えて、法的な観点から契約内容の調整、確認をします。また、調達から消費者に完成品がわたるまで、今やどんなメーカーでも国内では完結せず、海外とのビジネスの機会にとっても恵まれています。
—役割としては、トラブルを未然に防ぐ目的で？
それもあります。新規製品の開発や拡販、提携の一步を踏み出すビジネスチャンスに立ち会えるので、マイナスマ面の回避だけではありません。事業の成功・発展につながるよう意識して、契約内容を作っていきます。
—どんなところにやりがいを感じますか？
メーカーの醍醐味は自社製品を持つこと。日々、どの製品もたくさんの方の努力の結晶だと驚かされますし、そのぶん、自社製品への愛着や、多くの人に届けたいという思いが湧いてきます。保守的ではなく前向きに法律の知識を活かせることが嬉しいですね。また、開発や営業の方々のお話は、製品技術から世界情勢までとても興味深い。「事業を成功させる」という共通目的のもと議論し、よい方向性が見つ

どを教えてください。

グローバルに幅広い分野を扱う総合商社では、さまざまな法律問題に直面します。それに対し、営業部の方々と一緒になって悩み、考え、答えを導き出すことは、時に困難なときもありますが、非常にやりがいがあります。また、当社法務部では、目指すべき人物像として「法律を最も得意とする優れたビジネスパーソン」という表現をよく用います。弁護士はスペシャリストですが、法務の仕事はひとつに特化していれば良いというものではありません。法律が得意でいるいろいろなことに対応ができる社会人を目指したいです。
—高校生にひとことお願いします。
コミュニケーションの手段となる英語は必須ですね。それと勉強だけに追われず、さまざまな本を読んだり、海外に行つてその国の生活文化に触れて、日本だけでは得られない多角的な目線を養うことが重要かなと思います。今申し上げたことは、当時の自分にも厳しく言い聞かせたいですね(笑)。

—ありがとうございます。
ありがとうございます。



葭中聡 よしなか・さとし
私立大阪星光高等学校卒業。2004年京都大学法学部入学、陸上競技部では中距離の選手。2008年秋同法学部卒業。現在は三井物産株式会社法務部法務第四室(2011年3月現在)に在籍。趣味はジョギング、読書。

—将来的に携わりたい仕事や目標は？
—より大きな意味で、経営的でグローバルな視点を鍛えていきたいです。例えば、会社の方向性や業界の展望を見据え、中長期的にみて必要な判断や、海外の市場や国民性を理解したアドバイスなどができるように。また、製品の開発段階から事業が成功するまでを見届け、貢献できるようにしたいです。
—高校生にひとことお願いします。
—学部の勉強をしっかりやっていれば、入社時に求められる法律の知識は充分身に付きますし、入社してからも業務や研修を通して勉強できます。大切なのは、年齢や性別、国籍、理系や文系といった枠にとられず、さまざまな人と接すること。すぐには進路を見出せずとも、出会いの中で「なりたい自分」が見つかる。京都大学は、各分野で優秀な人と出会い、交流できる絶好の場所ですから、それを充分に活かして欲しいと思います。

—より大きな意味で、経営的でグローバルな視点を鍛えていきたいです。例えば、会社の方向性や業界の展望を見据え、中長期的にみて必要な判断や、海外の市場や国民性を理解したアドバイスなどができるように。また、製品の開発段階から事業が成功するまでを見届け、貢献できるようにしたいです。
—高校生にひとことお願いします。
—学部の勉強をしっかりやっていれば、入社時に求められる法律の知識は充分身に付きますし、入社してからも業務や研修を通して勉強できます。大切なのは、年齢や性別、国籍、理系や文系といった枠にとられず、さまざまな人と接すること。すぐには進路を見出せずとも、出会いの中で「なりたい自分」が見つかる。京都大学は、各分野で優秀な人と出会い、交流できる絶好の場所ですから、それを充分に活かして欲しいと思います。

—なぜ法学部を選んだのですか？
文系の中でも、社会に出て学んだ知識を発揮する機会が多いと感じたからです。当時はまだ漠然とですが、司法書士や企業の法務部など、弁護士以外でも専門性を活かすことができると

—なぜ法学部を選んだのですか？
文系の中でも、社会に出て学んだ知識を発揮する機会が多いと感じたからです。当時はまだ漠然とですが、司法書士や企業の法務部など、弁護士以外でも専門性を活かすことができると

—なぜ法学部を選んだのですか？
文系の中でも、社会に出て学んだ知識を発揮する機会が多いと感じたからです。当時はまだ漠然とですが、司法書士や企業の法務部など、弁護士以外でも専門性を活かすことができると



小林明日香 こばやし・あすか
県立奈良高等学校卒業。2003年京都大学法学部入学、ソフトボールサークルなどで活躍。2007年同法学部を卒業。現在はパナソニック株式会社リーガルコンサル&ソリューションセンター(2011年3月現在)に在籍。